

平成 30 年 5 月 16 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02429

研究課題名(和文) 明清における文学と経学の相関をめぐって その発展的考察

研究課題名(英文) A Developed Study concerning the correlation between a literature and a classics in the Ming-Qing period

研究代表者

江尻 徹誠 (EJIRI, TETSUJO)

北海道大学・文学研究科・専門研究員

研究者番号：80528232

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究「明清における文学と経学の相関をめぐって - その発展的考察 -」では、明末清初の学者である朱鶴齡とその交遊関係を端緒として、その当時における、文学と経学の相関関係を分析して、そこから、明末清初の学者たちが、多層的で複雑な交遊関係を形成しながら、その学術的立場を発展させていったことを確認した。

その成果は「朱鶴齡の著作と交遊についての一考察」などの諸研究により報告し、新たな知見を学界に提示し得た。

研究成果の概要(英文)：A Developed Study concerning the correlation between a literature and a classics in the Ming-Qing period-- :This research, specifically focus on Zhu He-ling(scholar in the late Ming Period and the early Qing Period) and his friendly relationships, to analyze the correlation between a literature and a study of classics. Finally it checked about the following points: The scholars in Early Qing Period, they build a multi-layered friendly relationships, and the relationships has advanced their research.

The result is reported by studies such as "A study of Zhu He-ling 's Writings and Relationships--", presented to the academic community to obtain new knowledge.

研究分野：中国文学

キーワード：明末清初 朱鶴齡 陳啓源 経学

1. 研究開始当初の背景

本研究計画「明清における文学と経学の相関をめぐって その発展的考察」は、明末清初期の文人・学者による文学的創作活動と彼らの交遊が、当時の経学研究に及ぼした影響について解明することを主要な目的とする。具体的には、明末清初に活躍した文人のうち、経学研究でも多くの成果を遺した朱鶴齡(1606～1683)を主たる研究対象としてとりあげ、その文学的創作活動と彼の交遊関係が、のちの経学研究に如何なる作用を及ぼしたか、考察をすすめていく。

最初に、本研究における研究対象である朱鶴齡についてふれておきたい。朱鶴齡は明末清初という王朝交代期を代表する文人・経学者のひとりであり、彼自身、その文学活動においては数多くの詩・文を遺していることが、『愚庵小集』などの著作からうかがえる。その一方で、『杜工部詩輯註』『李義山詩集箋注』のような、文化遺産ともいべき先人の業績を、よりよい形で後世に伝承するための事業もおこなっている。そして晩年には経学研究に没頭し、『禹貢長箋』『毛詩通義』(『詩経通義』ともいう)『詠左日鈔』『尚書埤伝』等を著して、五経の考察とその解釈に注力した。

朱鶴齡によるこれらの著作については、代表作である『愚庵小集』が幾度も重刊され、近年になっても、上海古籍出版社や華東師範大学出版社から再版されていること、また、中国の一大叢書たる『四庫全書』に著録された経学での代表的著作『毛詩通義』が、近年、齐鲁書社により編まれた『清経解三編』に収録されたことからみても、現代中国においてなお、彼の著作の学問性が高く評価されていることがわかる。

上記の出版状況から考えても、朱鶴齡とその著作が、その学術的価値を大いに評価されていることに異論はないだろう。しかしながら、申請者が朱鶴齡の学術に注目しはじめてからしばらくの間は、彼の学術活動の諸相を考察の対象に据える研究が充実しているとは言い難いのが実状であった。本計画を立案した当時、朱鶴齡に関する専著は管見の限りみあたらず、専論についても、たとえば中国における研究状況を、中国学術文献ネットワーク出版総庫(cnki.net)を用いて確認したところ、わずかに14篇の期刊論文と5篇の修士論文があるばかりであった。同様に、台湾における研究状況を確認したところ、国家図書館(台湾)のデータベースを用いても、3篇の期刊論文と4篇の修士論文があるばかりであった。

国内の状況はというと、長谷部剛「杜詩解釈の多義性についての一考察-銭謙益と朱鶴

齡の「注杜の争い」を中心として」(1997)および拙稿「陳啓源と朱鶴齡の詩経學-陳啓源『毛詩稽古編』の成立に関する一考察として」(2006)「朱鶴齡に関する基礎的研究-その人物と著述活動について-」(2014)があるばかりで、その研究状況は決して活発であるとはいえないものであった。

申請者は上記の拙論(2006)を執筆する際、朱鶴齡の学術の発展と文人達との交遊関係に、特筆すべき相関性があることを着想した。当該論文は朱鶴齡とその友人陳啓源が交遊を深めながら互いに切磋琢磨し、それぞれの著作を執筆したことを論じたものである。朱鶴齡の交遊関係については、たとえば先掲の『杜工部詩輯註』をみると、そこには「同郡参訂姓氏」と銘打って、彼のもとで同書の編纂に力を注いだ197名もの協力者の氏名が挙げられており、呉偉業・徐乾学といった当時を代表するような碩学も多く見受けられることから、朱鶴齡が人望を集めていたこと、そして当時の呉江における文人達の交流のいわば中心に位置し、かつそこで重要な役割を果たしていたことが推察できる。朱鶴齡には他にも顧炎武ら、多くの知友がいるが、もし朱鶴齡が彼らとの交わりの中で様々な知識と啓発を得ていたとすると、晩年の朱鶴齡の経学に対する理解と学識は、この交遊の中でこそ培われたのではないかと、更に言えば、彼の経学に関する著作群は、彼の文学者としての創作活動の、ある種の結実ではないかと考えた。

ここから申請者は、明末清初における文学活動と経学研究の関連性を、朱鶴齡という文人の学術活動とその交遊関係をひとつの端緒として考察することを企図し、若手研究(B)「明清における文学と経学の相関をめぐって 朱鶴齡の基礎的研究」(課題番号25770132)を申請し、採択を受けて研究を開始した。

ところが、朱鶴齡とその著作および交遊関係の基礎的整理は進んだものの、その中から新たな課題もみつかったため、この研究をより一層深化させる必要性があることが明白となった。

2. 研究の目的

本研究計画では、朱鶴齡による学術活動と彼の交遊関係を端緒として、明末清初期の中国学、とりわけ経学研究を深化させることをその目的とする。着手すべき研究課題としては、朱鶴齡の著作の整理・校訂、朱鶴齡の学際的交遊の検討、朱鶴齡とその知己達の学問に対する考察を挙げておきたい、これらの作業を進めつつ、国内の研究と比較して幾分か

研究が進んでいる中国・台湾の学者と意見交換を試み、そこから国内における当該分野の研究の底上げも図りたい。

3. 研究の方法

本研究計画では、主に朱鶴齡の交遊関係とその学術活動との密接なつながりに留意しながら、その著作の整理と内容の分析を進める。朱鶴齡に関しては先行研究も限られており、研究目的を順調に達成するにはその数少ない先行研究を有効に活用する必要がある。そのため本研究では、申請者が既に研究に着手しているもの、および関連する先行研究のあるものから優先して研究に着手し、考察することとする。

円滑な研究遂行のため、本計画では進行すべき研究課題を以下の様に設定した。

(1) 関連する朱鶴齡の著作の校訂・整理・分析：本研究における基礎作業のひとつとして、朱鶴齡の著作を整理・校訂する。申請者は『愚庵小集』『杜工部詩輯註』『李義山詩集箋注』および『詩經通義』については、諸版本の整理とその内容に関する検討を先だつて進めており、彼の文学者としての立場については先述の拙稿等で徐々に明らかとなっているが、経学に関連する著作である『禹貢長箋』『読左日鈔』『尚書埤伝』については、近年台湾で『読左日鈔』に関する専論が二篇発表された他には先行研究もみられない。そこで国内外を問わず彼の著作に関する校本等の文献や資料を収集し、それらを校訂・整理の上、朱鶴齡の学術についての基礎的分析を進める。

(2) 朱鶴齡の学際的交遊の検討：朱鶴齡の学術的交流に関して、申請者は先掲の拙論(2006)にて陳啓源との交遊について論じた。本課題では特に『愚庵小集』を活用して、朱鶴齡の交遊関係を整理し、そこから浮かび上がった重要人物について、その学問的志向や著作も併せて考察を進める。まずその名が挙げられる候補としては陳啓源と顧炎武がいるが、前者に関しては幾つかの拙論があり、後者についても専論として：周金標「顧炎武與朱鶴齡交往考論」(2009)が先行研究として存するため、それらを踏まえながら、朱鶴齡の交遊について更なる考察を進める。また、先述の長谷部剛氏による論考と同様に、朱鶴齡と錢謙益の間の学問的問題に関する先行研究が4篇あるため、これらの論考に整理を加えながら彼の交遊関係を明らかにする。

(3) 朱鶴齡の学友とその学問に関する分析：まず、前項において朱鶴齡と顧炎武との関係性についての考察を進めていることがか

ら、顧炎武の著作『左伝杜解補正』に着目し、朱鶴齡『読左日鈔』との比較研究を通じて、その特色と彼らの学術的交流の影響を明らかにしたい。陳啓源『毛詩稽古編』と朱鶴齡『詩經通義』との緊密な相補関係に関する研究を進める。このように、幾人かの朱鶴齡の友人について検討を重ね、最終的には、朱鶴齡の経学関連著作に内包される文学的要素を明らかにし、そこから翻って、文人たる朱鶴齡の見識・学術および彼の交遊関係が、その経学関連著作に及ぼした影響の実態を解明するとともに、彼の友人の研究や著作においても同様の影響がみられることを確認していく。

4. 研究成果

前項にて提示した三点の研究課題に基づき、今回の研究期間において、実際に着手し成果を得られた点について、以下の通り提示する。

(1) 清初を代表する文人・学者のひとりである朱鶴齡の人物像の解明、および朱鶴齡の著作活動に関する諸問題の解明。

(2) 朱鶴齡の経学関連著作である『詩經通義』『禹貢長箋』『読左日鈔』『尚書埤伝』等の諸テキストの収集・整理・校訂、およびそのテキストが持つ思想性に関する分析の進行。

(3) 朱鶴齡の交遊関係の整理、特に、陳啓源・顧炎武との交遊が持つ学術性と時代的意義についての考察。

まず(2)に関して、関連する著作の整理と校訂は、研究機関を通じて順調に実施され、その成果は、次項にて提示した口頭による発表「朱鶴齡小考 その著作と交遊から」「朱鶴齡小考 その著作と交遊から(二)」「朱鶴齡小考 その著作と交遊から(三)」の際に、附篇として、『禹貢長箋』『読左日鈔』『尚書埤伝』のそれぞれを、三回に分けて報告した。

(1)および(3)については、幾度かの口頭発表を経て、「朱鶴齡の著作と交遊についての一考察」(次項参照)により報告し、その成果を提示しえた。陳啓源および顧炎武に関する研究に加え、幾人かの学者を取り上げ、その学問的立場については、「清初文人の交遊とその学術思潮に関する考察」において、また彼らの思想性の一端に関しては、「文人の交遊とその死生観について」において報告した。

本計画における検討を通じて、文学者として名高い朱鶴齡が、知己達との多岐にわたる

交流のなかから経学にその学術的志向性を向け、晩年に執筆された彼の経学に関する著作がまた、彼と交遊する文人・学者達へと影響を波及させていったことを考察し整理しえた。これらの研究の結果として、清初の学界における学术交流とそれが持ち得た価値を、幾分かでも明らかにすることができたと思考する。

今後については、顧炎武ら、明末清初期の学者達の個別検討を通じて、同時代の学術的特色をさらに明らかにしながら論を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

(1) 江尻 徹誠

「朱鶴齡の著作と交遊についての一考察」
(査読有)
『道央文学会報』、2018年1号、1-6頁、2018年発行

[学会発表](計5件)

(1) 江尻 徹誠

「文人の交遊とその死生観について」
臨床倫理検討会
2018年

(2) 江尻 徹誠

「朱鶴齡小考 その著作と交遊から
(三)」
道央文学会
2018年

(3) 江尻 徹誠

「清初文人の交遊とその学術思潮に関する考察」
道央文学会
2017年

(4) 江尻 徹誠

「朱鶴齡小考 その著作と交遊から
(二)」

道央文学研究会

2017年

(5) 江尻 徹誠

「朱鶴齡小考 その著作と交遊から」

道央文学研究会

2016年

[その他]

該当無し

6. 研究組織

(1) 研究代表者

江尻 徹誠 (EJIRI TETSUJO)

北海道大学・大学院文学研究科・専門研究員

研究者番号：80528232

(2) 研究分担者

該当無し

(3) 連携研究者

該当無し

(4) 研究協力者

該当無し